言語学者・野間秀樹さんに聞く

インタビュー

音から文字を創った「師なくして自ら悟らしめん」

〈知〉の世界を拡げる『訓民正音』

ハングル

15世紀半ば　英断の大王

漢字漢文の世に革命

イデオロギーと表裏一体で

一つの言語圏の財産超えた存在

15世紀半ば、朝鮮王朝の時代、世宗大王は有能な学者たちを登用し、〈訓民正音〉（くんみんせいおん）を創製した。〈訓民正音〉は〈正音〉（せいおん）とも呼ばれ、後にハングルと名づけられた。「ハングルを見据える中で、私たちは〈音（おん）が文字となる〉驚くべきシステムを目の当たりにする」と語る言語学者の野間秀樹さん（57）は、このほど、著書「ハングルの誕生―音から文字を創る」（平凡社新書）を刊行した。15世紀に至るまで、朝鮮語は多くの言語と同様、〈話されたことば〉としてのみ存在した。〈正音〉の創製によって、未だかつて誰も見たことのない、15世紀朝鮮語の〈書かれたことば〉がこの世界に出現した。ハングルの誕生と発展には〈知〉をめぐる壮大なドラマがあった。

―この本で一番強調なさったことはなんでしょうか。

ハングルというものは、実は、そして面白く、深いということです。そのことを本当に知るためには、どうしてもハングルの持っている普遍的な深さを見たい。

ハングルというものを、言語とは何か、〈知〉とは何かという非常に大きな問いを問うことになる。そこが面白いわけです。

私は言語学を学ぶ者ですので、ハングルに対する思い入れも大きいと思いますが、百歩譲って見ても、〈訓民正音〉の創製にまつわるドラマは、驚異的な〈知〉の世界とも呼ばれる書物になっているかというと、そこに登場しますね。しかし例本（かいれいぼん）と呼ばれる書物です。〈訓民正音〉は、木版に彫られ、紙に刷って、それを製本し、何と書物に編んで世界史の中に登場します。

その書物に何が書かれているかというと、そこには〈正音〉は誰がため、いかなる目的で創られたということが書かれている。そしてこのような字と決定的に違うことがある。

それは世界史への文字の登場の仕方です。文字とは亀の甲羅に彫られたり、石に刻まれて世界史に登場する者に、師なくして自ら悟らしめんことは、漢字漢文の世界に革命をもたらした形式でハングルを用いて書くことです。漢文とは、過去に誰かが何かについて語った、広い意味での、一種の〈物語〉です。

『訓民正音』の解例本

野間秀樹さん

『ハングルの誕生』平凡社（980円＋税）☎03・3818・0743

野間　秀樹（のまひでき）1953年生まれ。朝鮮言語学、日韓対照言語学などを専門とする言語学者。著書に『韓国語語彙と文法の相関構造』（ソウル、太学社）、『新・至福の朝鮮語』（朝日出版社）、『絶妙のハングル』（日本放送出版協会）など。共著書に『ニューエクスプレス韓国語』（白水社）、『きらきら韓国語』（同学社）、編著書『韓国語教育論講座全4巻』（刊行中：くろしお出版）。05年大韓民国文化褒章受章。96～97年ソウル大学校韓国文化研究所特別研究員。前東京外国語大学大学院教授。

文字の始まり　読む人が体験

ところが、『訓民正音』に書かれたことば（を）を読むときには、過去の物語を読むだけではない。私はどういう文字であるか、私はどういう文字だから、こういうように読んでね、ということを、いま・ここで、読む現在に体験することになる。

こういう本というのは、ちょっとありません。つまり、文字としての原初、音（おん）が文字になるそもそもの始まりを、この書物を編（ひも）く人の全てが、常にいまその場で〈出来事〉として体験することになる書物なのです。いまそこで文字が文字として生起する、そういう体験を、ハングルはどれかの時代に体験したのです。

深い出来事に感銘を受けた

私が感銘を受けたのは、ハングルが世界に出たということよりも、もっと深い出来事がそこになって再発見された当時、女性たちのための教育に、『訓民正音』そのものが実際に使われていたのであることがわかっています。

驚きと感動できっと学んだ

発見された慶尚道の旧家で『訓民正音』を朗んで学んだ人たちは、どういう体験をしただでしょう。ああ、私たちのこのことばはこうして書けるのだと、皆がきっと驚きと感動をもって学んだのではないでしょうか。その喜びは、決して一つの言語圏の喜びに留まらない。チャチャ語のみならず、うふうに書ける、この文字がこのように読める、それを人々が体験する。

先生のおっしゃる知の共有化のための革命的な力とする手応えがします。

ハングルはその深さ故に、単に一つの言語圏の財産だけではない。人間にとってことばとはいかなるものか、文字とは何かといった、普遍的な問いを投げかけてくれる、そうした存在です。ハングルを限らず普遍的な問題を考える、それが本当に豊かなことだと思うのです。おっしゃる通り、この小さな本が手がかりの一つになってくれたら、こんな嬉しいことはありません。

思想や感性で歴史に挑んだ

―文字が創られただけでは、文字として働かないのだ、そこには〈命がけの飛躍〉が必要だということも、お書きになっています。

ええ。音（おん）を基礎にして文字を創った。でもこの音をどう表すと決めたから言って、今日私たちが〈文字〉と呼んでいるようなものになるわけではありません。文字が音を表す、ではその文字で単語は書けるのかという問題がある。次に文が書けるのか、その文のつながったテクスト、一連の長さの文章は書けるのかという問題が来る。文体も創らねばならない。

一方で文字を〈書く〉ためのあらゆるシステムや技法も必要になります。筆で書くときはどうする。タイプライターでは打つときは、スマートフォンならどうする、フォントはどうする、といったことまでですね。

〈文字〉が〈文字〉たるためには、思想や感性、身体からテクノロジーまで、一つ一つ新たな地平を獲得しなければならない。

〈訓民正音〉はそもそも創られるときからそうでした。そうして壮大な歴史があるわけです。

―なるほど。文字とは紙の上だけの出来事ではない

そうですね。文字というのは例えば政治などとは、生まれてから死ぬまで、そして死んだ後も漢字漢文の世界です。

官吏登用試験である科挙などは言うに及ばず、詩を書くのも、文を読むのも、王からも死を賜るのも、死してのちに許されるのも、全てつひとつに意味があり、これを組み合わせて知を形成している、そういう考え方ですね。考え方と言いましたが、何か選択できる考え方の一つというものではない。

漢字漢文が入ってきて〈義〉なら〈義〉という文字を単位として私たちの思想、知の全てが成り立っている。知の核になるものは、全て漢字です。漢字をどの本では細胞という比喩で表しましたが、細胞である漢字の一つひとつに意味があり、これを組み合わせて知を形成している、そういう考え方ですね。考え方と言いましたが、何か選択できる考え方の一つというものではない。

漢字漢文が入ってきて、従って王朝の知識人たちにとって、〈正音〉、ハングルのような仕組みなど、絶対にあり得ない存在なのですね。自分たちのありとあらゆる〈知〉というのは漢字漢文で形成されている。

例えば、仁（ならびに）、義（なら）、礼（ならびに）、智（ならびに）、信（ならびに）、孝（ならびに）、悌（ならびに）、忠（ならびに）、恕（ならびに）、愛（ならびに）、敬（ならびに）、誠（ならびに）、恥（ならびに）、廉（ならびに）、節（ならびに）、義（ならびに）、勇（ならびに）、…

以来、15世紀に至るまで、朝鮮、高麗、新羅などという王朝を養いて、あるゆる知識人が、原理的に、崔萬理と同じように考えていたのです。だから崔萬理たちがいくつもの王朝さえも貫く正統であり、世宗大王たちこそが異端であり、革命派だったのです。

〈知〉とは漢字を単位として初めて成り立つものだった。〈正音〉のように、これが／ㅁ／で、これが／ㅂ／で、などというたぐいに、細胞をいわば原子や分子に解体してしまうのは、そんなものは〈文字〉といったものではないと、崔萬理たちは正音革命派の理論の前に驚愕したのです。

世宗大王貫く　用音合字こそ

王を諫（いさ）めるため、提出した大上疏文（じょうそぶん）の中で、崔萬理は「音を用いて字を合はすは、尽く古に反する」ということばで正音を批判しています。〈用音合字〉はことごとく、いにしえの習わしにはないものであると。世宗大王はそれを読んで、真っ先にこの〈用音合字〉の下りに反論しています。

この点について研究者たちは皆、あまり注目していませんが、王が最初に問題にしているというのは、〈用音合字〉の思想そのものなのです。いまそこで文字が文字として生起する、そういう体験をすする。これは本当に驚いことです。

―「ハングルの誕生」のことばで言うと、音（おん）が文字となる瞬間を、まさに出来事として体験できる

その通りです。例えば、この本でも扱いましたが、インドネシアの少数民族の言語、チャチャ語をハングルで書くということ。これは私がたまたま韓国にいた時に、ニュースで大きく取り上げられていました。

それはまさに世宗大王が考えていたことです。

韓国語や日本語は書かれるのが当たり前になっているので気づきにくいのですが、世界中に数千はあると言われる、ほとんどの言語は〈話されたことば〉しかない。文字に書かれる言語は非常に限られています。そうした話されたことばが、例えばハングルという文字によって〈書かれたことば〉として地球上に登場する。これは涙が出るほど、感動的なことですよね。

世界にたった一つ残っていた『訓民正音』解例本という本は、ソウル大学校の金周源先生の近年の研究によって、現代に起こったと思うからです。

つまり、この世界に音（おん）としてのことばはなかったのです。それが書かれるということがない。

宮の中で公然と行われて、それがきちんと記録される書物なのです。

この思いを共にしていたのは、崔萬理たちだけではない。王が最初に問題にしているというのは、〈用音合字〉の思想そのものなのです。これは〈知〉のありようの全てであったからです。

一つの言語圏の財産超えた存在

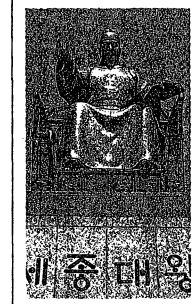
―ハングルはどれからどのような方向へ向かうのでしょう

これからハングルが、ハングルの誕生と成長の中の〈知〉や経験とどちらへ向かうかということは、ハングルが決めるのではなく、人間が決めることですよね。政治や経済、社会といった、いろいろな条件と関わりながら変わっていくでしょう。

その際に、善いを述べるのが許されるのなら、今後、ハングルをめぐる〈知〉の、さまざまな豊かな可能性、私たち人間にとっての普遍的な可能性を、できるだけ多くの人々が共にできれば嬉しいですね。

その出発点の一つとして、ハングルの誕生と成長の中の〈知〉や経験といったものを、皆で少しずつでも、共有化していけたらと思います。『ハングルの誕生』の中に書いたようなことの一部は、実は日本の国語の教科書や英語の教科書で触れられてもいいようなことなのではないでしょうか。

―一般の読書人を対象に、ハングルについてこれだけ広く、深く、面白く書かれた書物はありませんでした。記者自身が読んで受けた感動を考えてもそうですし、刊行後3カ月で、あちこちの書店で既にベストセラーの呼び声が高いのを見ても、『ハングルの誕生』は、『訓民正音』の解例本の書物でいうと、ここ3カ月で、あちこちの書店で既にベストセラーの呼び声が高いのを見ても、『ハングルの誕生』は



ソウルの光化門広場に建つ世宗大王の像